

くすると、牛乳が空になつて、子供は切りに飲みたがつて泣く、するとお守りは、面倒くさいからいきなり、途中で、其空罐に水を入れて飲ませるのを見た事がある。第一子供に水を飲ませるのが既に不都合で、まして性の知れない水に於ては尙更、夫に懐の温みで夏などは殊更、乳首なり、ゴム管の中が腐敗物がついて居るかも知れぬ、以て上は、まことに危険な事だから、餘程注意しなればならぬ。夫から、子供を遊ばし居中に、例へば椽から落ちる、或は水溜に落ちる、歸つて明白地に主人にいふと、叱られるから、黙つて宜い加減にいつて置く、所が、夫が打ち所が悪かつたり又は水が耳の中などに這入つて居た爲に暫くすると飛んでもない大疾ひになることがある」といふのです。

一體、子守りやばわやなどが、万一子供につきて誤をした時に、甚く叱つたりするのはよくありません。夫が爲めに、遂には、何事も判然いはないで、隠したてをする様になります。過は誰しもある事で仕方がありませぬから、そんな時には叱らないで柔にいつて聞かさねばなりません。固より故意にするよふな者は、之は論外で、そんな者は始から雇はないのが宜しいのです。

貞一の日記(拔萃)

(明治卅六年五月卅一日生男兒)

その母

八月廿八日 父は玩具のステツ、貞一は衣紋等にて、大鼓を叩き居りしに、やがて父の持てる、ステツキをも興へよとて、之を取り、兩手にステツキと衣紋等を持ち、得意氣に獨りで叩きて遊ぶ

おもゆ 四回 乳 晝三回 夜一回

午前四時起き 午後七時半眠る 晝寝二時間

八月卅一日 粥を喰る時、ふと茶碗の繪に、心づ

き、一口喰べては、エー〜と云ひながら、繪を

指さす、繪は六歌仙を赤く晝きたるものなり、

午後より母に抱かれて、車に乗り、父は自轉車に

て、神田一ツ橋通の、東氏を訪ふ、玄關へ入るや

否出で迎へられし夫人は、修善寺にて、御世話に

なりし方なれば、喜びて直ちに抱かれたり、家は

初めての所なれど、人はおなじみ故、大喜びにて

はひまわる、二階の階段を見つけ、直にわがらん

とす、庭の方を見せて、花々といへば、そこにわ

りし、朝顔の鉢を、指さす、

歸途田中氏を訪ふ、可愛らしき猫あり、貞一大聲

を出してよるこび、猫とたわむれては、猫の眼を

つきに行く、猫はまた爪を出して引きかく、引搔

かれて、變な顔をしては手をひつこませ、またし

ばらくしてはわすれてからかふ、

桂の霜(三梳)二回、かゆ一(二梳)二回、乳二回、

午前四時起き、午後七時眠る、晝寝一時間

九月二日 朝庭に出で、空を見上げ、有明の月の

影淡く、残れるを見て、エー〜と指さす

そろ〜乳をやめんとて、母學校へ行く前に、飲

ませしと、歸りて飲ませしと、夜に入りて眠る時

に、飲ませしとをやめ夜半の分は飲ます事に今日

より定めたり、朝は無事にすぎ、午後母學校より

歸り來りしに、例の如くよろこびて抱きつくや否

や直に懷をわけしに、乳首に赤く寶丹のぬられし

を見て、變な顔をしてながめ居しが、こわさうに

ちよいとなめて見、直ぐやめて情無い様な顔をし

て泣く、それより時々手を乳の傍へ出せば、から
い／＼いや／＼と首をふりて見すれば、自分も首
を振つて手を引きこめてしまふ。

夕飯後、父とたわむれ居りしが、ねむくなりしか
兩手にて時々、眼をこすりながらも、母の傍へは
來ず、機嫌よく遊ぶ、余りねむそう故、母抱きと
りて、室内をあるさまわりしも、なか／＼ねむら
ず、父代りて試みしもねず、また母抱きて臥床に
ねかせ、母傍に臥して、子守唄をうたひしに、ウ
ツラ／＼としながら、手を乳の傍に出す故、から
いよといへは引きこめて、余り可愛想なれば、貞
一の兩手を重ねて、母の頬にあてさせ、母の片手
にておさへ、片手にて、こもりつけしに、十分ば
かりたちてすや／＼とねむる、

桂の霜(ツ)二回 かゆ(一梳)三回 玉子湯一回

午前五時起き 午後八時眠る 晝寝一時間

九月四日 今日はじめて、ランプを見て、あつく

／＼といふ、三わし四わし、ヒヨロ／＼とあるさ
手をとつてやれば、一間位ずん／＼あるく、

今夜は夜半に飲む乳をもやめんと、桂の霜を用意
して置き、さめし時飲まして、乳はしと泣く、
父起き出で、かやの外にて、いろ／＼すかしな

がら、眠らせんとしても、中々ねむらず、大聲に
て泣き叫ぶ故、まだ物欲しき故ならんと、玉子湯

をのませ、二時間あまり、手をつくして、こもり
しもいねず、余り急に、やめてみると、おもひかへ
し、とう／＼乳をのませば、ちよつと飲みしばか
りにてぐら／＼ねてしまふ、

かゆ 五回 桂の霜 一回

午前六時起き、午後七時眠る、

九月八日 遼陽占領の祝捷として、毎日提灯行列あり、今日は下谷徒士町有志七百名の催しあり、母に抱かれ桶屋の横にて見物す、赤き提灯を見てよろこぶ、夜に入りて、父母に伴はれ市中の賑を見に行く、電車の中混雑して空席なし、漸くにして母と貞一は席を得、父は其の前にぶらさがりて立つ、暫時にして、前の方に空席出来し故、父其の方に行かんとせしに、心細く思ひしか、手を伸ばして泣く、傍に職人体の男あり、ソナナ弱い事ではいけないね、父さんが戦地へ行つたらどうしますと戯る、

九月十一日 父母につれられ本郷の松下氏を訪ふ佛壇にありし鐘を拜借しよるこんでたゝく、また美しき旗をいたゞく、歸途馬上の伯父さん所へより、時計を拜借し、伯父様貞一の耳の傍へ時計を

わて、聴かせてくださると、自分も時計を耳の傍へ持ち行かんとしては、通りこして肩にかつく様な事をして、皆様を笑はせる、其中ねむくなり其儘横になつて眠つてしまふ、

▲露國の神去る 露都の中央ポゴロチトツキイ寺院に安置してあるカザン聖母の神像いつの間にか無くなつた、全國民の信仰して居る神像であつたから之れ神が露國を見捨て給ふたのだと斷食して祈るやら神の審判の日が來たと家財を賣拂つて妻子を山奥へ送るやら大騒ぎ